

# FAIRY TAIL外伝—フェアリーシスターズ—

夜秋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

FAIRY TAIL原作完結後な感じです。

主人公のアリス加入は解散後、再結成時に加わった感じです。

加入時の話は後で出来たら・・・と。

主人公はアリスとウエンディでのんびりとクエストしていたり、S級試験受けたりって感じです。

一部魔導士の力関係やギルドの力関係が変わっていたり存在しないギルドがあったりします。

また、オリジナルとは違うギルドに所属する魔導士がいたりもします。

# 目次

プロローグ	1
プロローグ	1
設定資料	7
大魔闘演武編	
大魔闘演武へ	14
大会1日目 開会式	19
1日目 競技パート	
伏魔殿（パンデ モニウム）	25



プロローグ

プロローグ

フェアリーテイル  
妖精の尻尾。

ファイオーレのギルドであり数々の伝説がある。

曰く、ティターニア妖精女王が100体の魔獣を同時に相手したとか。

曰く、サラマンダー火竜がそこら中の建物を破壊しているとか。

良い噂も、悪い噂もある。

そんな中、今一番騒がれているのがフェアリースターズ妖精姉妹と呼ばれる2人の魔導士だ。

天空の滅竜魔導士ことウエンディ・マーベル。ドラゴンスレイヤー

虹の滅龍魔導士ことアリス・アルヴァスター。ドラゴンスレイヤー

2人の少女で組まれたコンビでギルドのアイドルであり、ギルド最強各のパーティーだ。

そして、今もクエストを終えギルドに帰還したところであった。

「ミラさん、クエスト終わりました。」

地に着く程長く伸びた艶やかな黒髪ロングストレートに真ん丸な紅い瞳でとろんと

した眼、小さな鼻と口で丸顔気味の小顔。

膨らみの殆ど無い胸に括れた腰、細く華奢な手足で両肩と両二の腕、両腰、両踝に黒い龍の鱗がある。

服装は黒いブラウスに紅いネクタイ、膝上10cm程度の紅いプリーツミニスカートに膝上10cmの黒いオーバーニーハイソックス、黒い膝下20cmの編み上げブーツ。

スカートには銀色の四角いバックルの付いた茶色いベルトを通しておりベルトの右腰には小さなカードホルダー程度のポーチが付いている。

そして左腰には護身用の黒い柄に銀色のギザギザの刃が茶色い鞘に納められたサバイバルナイフ。

長袖コートは膝下10cmの丈で襟は立っており長袖を二回ほど折り曲げ手首から10cm程度が見えるようにしてある。

アリスが受付兼酒場の看板娘であるミラジエーン（ミラ）にクエストの報告をする。

「お疲れ様。何か飲む？」

「私はカシスジュースで。」

「私はオレンジジュースかなあ。」

アリスとウエンデイが言った。

ミラは2人の元にカシスジュースとオレンジジュースを持って行くと2人の合い向かいに座った。

「今日はどうだったの？」

「いつも通りだよね？」

「うん。アリスが片付けて私がある間に怪我人の治療をしました。」

ミラが聞くと2人は嬉しそうに答える。

回復魔法や援護魔法に長けた天空の滅竜魔法を得意とするウエンデイと特殊な滅竜魔法を得意とするアリス。

2人は役割分担を行い、救助なんかを率先して行っていた。

「じゃあアリスちゃんのお母さんは？何か情報あった？」

「ない、かな。」

「虹龍イリスだろ？俺とかウエンデイみてえに体の中にいんじやねえのか？」

ナツが話を聞いて割り込む。

「それはあり得ません。」

私はアクノロギアを倒す為に育てられた訳では無いですし、そもそも、お父さんの気配は微かにするんです。

「この世界の何処かにいるって、わかるんです。」

「ふうん。でもよー、この世界にドラゴンなんてアクノロギアしかないんだろ？隠れてるなら何処にいらんだろうなー？」

俺も色んなところで聞いてみてるけどドラゴンの話なんて大抵でっけーとかげだぞ。」

ナツが言った。

「それでも、少しでも可能性があるなら探します。」

私の本当のお父さんだから。」

「ああ、わかってる。俺も聞いてみるからよ。見つかるというーな。」

ナツが微笑んで言った。

なんやかんや言ってる各地でイリスの情報を集めてくれている。

「でも、不思議よね。」

龍と人のハーフなんて。

その鱗も龍そのものなんでしょ？」

ミラが鱗を見て言った。

「お母さんは私を産んですぐ死んじゃったらしいですけど滅竜魔導士だったらしいです。」

だから私は産まれたんじゃないかって。

滅竜魔導士は限りなく竜に近い人間ですから。」



「それで産まれたのが滅龍魔導士ってのもすげーよな。」  
ナツが言った。

「確か、滅竜魔導士の上位互換なんだっけ？」

より竜に近い滅竜魔導士なの？」

「いえ、滅龍魔導士なんて私だけですよ。」

半分龍だからこそ高い威力の滅竜魔法を放てる。

適正があるらしいです。」

私が言った。

「読みも同じで訳わかんねーよ。」

「あはは、まあ、ナツさんの魔法よりも強いつて感じですよ。」

ちゃんと扱えればですけど。

それと、私の魔法は別物だからナツさんも食べられますよ。」

「滅竜魔法なのに食えんのか!？」

「威力が高いので沢山は無理だと思えますけどね。」

「へえ、食ってみてえな。」

「ナツ！行くぞ！」

話をしていたらエルザが入り口で言った。

「どうやらこれからクエストらしい。

「あいさー！んじや行ってくる!!」

ナツがそう言つてエルザ達の後を追つて外へと出ていった。

私達はと言うと今日は予定もないのでこの後はのんびりとする予定だ。

## 設定資料

\*アリス・アルヴアスター

性別：女

年齢：12歳

魔法：虹の滅龍魔法

好きな物：甘い物（特にスイーツ）、ウエンデイ、大人っぽい服や仕草、それをこなせる人、強い魔法。

苦手な物：乗り物、ピーマン、ゴーヤ、話を聞かない人。姑息な魔法、美味しくない魔法。

身長：145cm（ウエンデイを147と仮定）

※FAIRY TAILメンバーの身長は正確な数値が出ていないので自分の推測です。

体重：ヒミツ

3サイズ：???（ウエンデイとほぼ同じ。）

\*\*\*

本作の主人公でウエンデイと共に妖精姉妹と呼ばれる。

ウエンデイとは同い年&amp;amp;同じ滅竜魔導士と言うこともあり加入後すぐに意気投合し、今では部屋もフェアリーヒルズの一室をルームシェアして2人で暮らしている。

母が人間、父が虹龍であり、人間と龍のハーフ。

その為体には鱗があり、角や翼や尻尾を生やす事も可能だが魔力消費も大きいのであまり使わない。

扱う魔法は滅龍魔法で滅竜魔法の上位互換な魔法。

虹龍の力は魔法を食べる事ができ、食べた魔法をコピーして滅龍魔法として発動出来る。

しかし、一定量（本人曰く満腹になるまで）食べないとコピーは出来ないらしい。

また、食べた魔法を混ぜ合わせ独自の魔法を作成する事も可能だがこれも滅龍魔法限定らしい。

実力だけで言えばギルドトップクラスだが本気を出すことは殆ど無く、本人曰くナツやエルザにはまだまだ遠く及ばないらしい。

\*扱う魔法

・龍<sup>テイクオーバー</sup>接収

放たれた魔法を食らう事で自分の物にする。

その時自動的に滅龍魔法になる。

・龍<sup>モルド</sup>変化

自身の力を別の滅龍魔法に切り替える。

切り替えると鱗の色が変わる。

・龍<sup>ミックス</sup>配合

自身の持つ魔法を2つ組み合わせて1つの滅龍魔法にする。

・龍<sup>デリート</sup>消去

接収した魔法を消去する。

・龍<sup>ギフト</sup>転嫁

ミックスで作った魔法を相手に渡す。

渡すには条件があり、

①混ぜた魔法のどちらかを相手が使ええる事。

②相手が滅竜魔導士である事。

③相手が既にギフトを受けていない事。

④他にギフトを誰にも渡していない事。

の4つの条件を満たした場合のみ舌を絡めたキスをする事でギフトを渡せる。

・滅龍魔法

滅龍魔法の上位魔法。

威力が倍近く高い。

《所持魔法》

火龍（火竜）

ナツから貰った力。基本はナツと同じ。

ナツとバトルをした時食べた。

天龍（天竜）

ウエンデイから貰った力。基本はウエンデイと同じ。

ウエンデイとコンビを組んだ時貰った。

鉄龍（鉄竜）

ガジルから貰った力。基本はガジルと同じ。

2人の魔法を貰うのを見たガジルが「強くなれよ」とくれた。

雷龍（雷竜）

ラクサスから貰った力。基本はラクサスと同じ。

ひょうりゅう  
何度も頼み込まれラクサスは嫌々あげた。

氷龍

グレイの魔法を食べた力。氷を使えるが造形魔法は練習中。  
刃龍じんりゅう

エルザが捨てようとしていた剣を食べたら使えるようになった。

星龍せいりゅうルーシイの魔法を食べた事で使えるようになった。

星霊の力を使えるが召喚は出来ない。(鍵が無い為)

・ミックス

天火龍てんかりゅう

火龍と天龍の合わせ技。火と風を操る。

鉄火龍てつかりゅう

火龍と鉄龍の合わせ技。燃える鉄を操る。

天鉄龍てんてつりゅう

天龍と鉄龍の合わせ技。風を纏った鉄を操る。

雷炎龍らいえんりゅう

雷竜と火龍の合わせ技。ナツの真似をしてやった。火と雷を操る。

天雷龍てんらいりゅう

天龍と雷龍の合わせ技。風と雷を操る。

雷鉄龍らいてつりゅう

雷龍と鉄龍の合わせ技。雷を纏った鉄を操る。  
ひょうえんりゅう  
氷炎龍

氷龍と火龍の合わせ技。火と氷の力を操る。  
ひょうてんりゅう  
氷天龍

氷龍と天龍の合わせ技。氷と風を操る。  
ひょうらいりゅう  
氷雷龍

氷と雷の合わせ技。氷と雷を操る。  
ひょうてつりゅう  
氷鉄龍

氷龍と鉄龍の合わせ技。凍てつく鉄を操る。  
てんじんりゅう  
天刃龍

天龍と刃龍の合わせ技。空気を刃にできる。  
えんじんりゅう  
炎刃龍

炎龍と刃龍の合わせ技。炎を刃にできる。  
えんじんりゅう  
雷刃龍

雷龍と刃龍の合わせ技。雷を刃にできる。  
らいじんりゅう  
鉄刃龍

鉄龍と刃龍の合わせ技。剣を作れる。



星龍はミックス出来ないらしく、作成不能。

・滅龍魔法

基本的には他の滅竜魔法よ威力が倍になった版であり、動作としては変わらない。

また、虹龍自身の滅龍魔法は接收が無い状態でしか使えないらしい。

\*\*\*

\*滅龍魔法

アリスが使う魔法。

滅竜魔法の上位互換で扱えるのは龍に近い滅龍魔導士のみ。

滅竜魔法の倍近くの威力がある分消費魔力も多い為扱うには龍レベルの魔力が必要となる。

龍が使う魔法もこの魔法とされているが詳細は不明。

\*虹龍イリス

アリスの母である音の滅竜魔導士アンナとの間に子を成したドラゴン。

光に反射して七色に輝く真っ黒い鱗が特徴のドラゴンでアンナに魔法を教えた音竜の兄らしい。

X777年にアリスの元から姿を消したがアリスの体内に入った訳ではない。

## 大魔闘演武編

### 大魔闘演武へ

「じつちゃん！大魔闘演武が開催されるって本当か!？」

ナツがギルドに飛び込んできて言った。

そう言えば、毎年恒例なんだよね。

この頃は色々あつて参加できなかつたらしいけど。

「うむ。今年はフェアリーテイルも参加するぞい。メンバーも決めておる。」

「誰だろうね。」

「うーん、ナツさん、エルザさん、グレイさんは確定じゃない？」

後はミラさんとか？」

ギルドマスターの言葉に皆がざわざわとする。

私とウエンデイも2人で誰かを予想する。

「出場メンバーはナツ、ラクサス、ガジル、ウエンデイ、アリスの5人じゃ。」

ギルドマスターが言った。

嘘っ!?!私達も入ってる。

「ふむ、滅竜魔導士チームか。面白いな。」

「ふふつ、皆頑張ってるね。」

エルザとミラが言った。

私としては2人とも参加だと思ってたけどな。

「ギヒっ腕がなるぜ。」

「しゃあ！燃えてきたああ!!」

「えとえと、頑張らなきゃ、だね。」

「うん！」

ガジル、ナツの2人は盛り上がっている。

ラクサスは現在クエスト中で不在だ。

「アリスは初出場じゃったか。」

お主の力、存分に見せてやれえ。」

マスターが言った。

初出場、緊張するなあ。

「大丈夫だよ！2人一緒だもん！」

ウエンデイが私の手を握って言った。

そうだよな。私達2人一緒だもん勝てるよね！

「確か今年からルール変わるって聞いたけど。」

ルーシイが言った。

私としては初出場だから変わっても関係ないけど・・・

「確か予選で一気に4チームまで減らすんだろ？」

「今までの決勝進出が半分になるんだよな。」

グレイが言った。

確か今までは予選を勝ち抜いた上位8チームが決勝だったんだよね。

「ミラ、その辺りの説明を頼む。」

「はい、マスター。」

今回の大会からはギルドマスターもある意味参加するんだ。

詳しいルールはこれを見てね。」

### 大魔闘演武新ルール

①参加には予選5名、決勝5名の10名必要である。

②予選勝ち抜き順にポイントを与え、決勝はそのポイントを持って始める。

1位：10Pt 2位：8Pt 3位：5Pt 4位：2Pt

③決勝では午前の競技パートと午後の対戦パートがあり、3日間で行う。

④午前の競技パートではギルドマスターの采配に基づき選手の選出を行う。

- ⑤ 午後の対戦。パートでは指定された選手が出場となる。
- ⑥ リザーブ枠は廃止となる為欠員が出た場合予選選手から代わりを入れる。
- ⑦ 欠員以外での選手交代は不可能とする。

えっと、予選と決勝で出場できる人は違うのか。

あれ？ だとしたら予選は誰が出るの？

「さて、予選じゃが・・・」

エルザ、ミラ、ギルダーツ、グレイ、ルーシイに頼もうかのう。」

「それ、予選の方が強くねえか？」

グレイが言った。

確かに。

予選の方が戦力高そうな気がする。

「ふむ、決勝は考えられたメンバーじゃ。

ナツ、ガジルはセイバートウースの双竜と当たって貫かねばならん。

ラクサスは単純な力量。お主ならば誰相手でも渡り合えるじやろうて。

アリスとウエンディはコンビネーションを見込んでじゃ。

それに、2人はうちの看板じゃからのう。2人を出さねばブーイングが来そうでの。」

マスターが苦笑いで言った。

あー、そういう・・・

「予選はその5人を抜いた最強メンバーを揃えたわ。

それに、私達5人を押さえての決勝メンバーって思わせればかなり強いと思われるじゃない？」

ミラが言った。

いや、流石にギルダーツやミラに勝てるわけが・・・

「でもよ、ギルダーツ出てくれんのかよ？」

「話したらすぐにOKしてくれたわよ。」

カナに良いところ見せるんだって言ってたわね。」

ナツが当然の疑問をぶつける。

ギルダーツはふらふらと旅をしているから参加できるかわからないと思ったが親バカなんだなあ。

「大会は来週、皆頑張らしましょうね！」

ミラの言葉で皆がおおー！と声を上げる。

なんだか、ドキドキしてきたなあ。

# 大会1日目 開会式

「さて、始まりました。大魔闘演武〜!!」

実況はこの私、マトー君がお送り致しますカボ〜」

カボチャを被った国王様が言った。

えっと、あれもうバレてるよね？

「さて〜予選勝ち上がったのはご覧のようになりました!」

順位 ギルド名      1位 妖精の尻尾      2位 剣咬の虎      3位 蛇姫の鱗

4位 妖精の棺

「1位は久し振りの出場フェアリーテイル!今年も熱い展開を見せてくれるのか!

それに続くはセイバートゥース!双竜率いるエリート集団!

3位にはラミアスケイル。ジュラが抜けても順位を落とさず出場です!

4位は初出場!フェアリーコフィン。

最近出来たギルドがまさかの決勝進出です!」

司会の言葉と共に皆が闘技場上がる。

見たことのある有名な顔ぶればっかりで凄く緊張するな。

だけど、フェアリーコフィンだけは知らないギルドだ。  
どんなギルドなんだろう？

「さて、それでは本日の日程です！

午前の競技。パートは伏魔殿。  
パンデモニウム

今回は1チーム2名での参加となります。

そして午後のバトルパート。

フェアリーテイルのラクサスVSラミアスケイルのリオン。

セイバートウースのミネルバVSフェアリーコフィンのセントラルです！

それでは、パンデモニウムから始めるカボ！」

競技はパンデモニウムか。

確かエルザが出てたやつだよな？

今回は2人って話だけどそれならナツとガジルかな？

「今回のパンデモニウムじゃがアリスとウエンディに頼もうかの。

2人のコンビネーションなら勝てる。

がんばるのじゃぞ！」

「じっちゃん！俺が出る！」

「待てい。ナツは明日じゃ。最終日には双竜との対戦も控えておる。ここは2人に任せ



るのじゃ。」

マスターが言った。

えっと、私とウエンデイ!?

兎に角頑張るしかないよね!

「エルザさん!パンデモニウムの事教えてください!」

ウエンデイは見ていたかも知れないが私は完全初見だ。

だから、経験者のエルザに聞くことにした。

「ふむ、熱心だな。」

パンデモニウムは順番がものを言う競技だ。

一番最初になれば勝ち確定だな。」

「え?戦う数は決められるんですよね?」

「うむ。だから一番最初に半数以上を倒してしまえば1位は確定する。」

まあ、私は全部倒したがな。」

エルザが言った。

流石はエルザだ。

「あれは凄かったわね。エルザ1人で100体倒しちゃうんだもん。」

話を聞いていたルーシイが言った。

100!?

もつと少ないと思つてたけど、でも確かにエルザならそのくらい倒せてしまひそうだ。

「まあ、2人なりに頑張ると良い。

無理はするなよ。自分の実力に合った数を選んだ方が良いからな。」

エルザがそう言つて私達2人の頭を撫でた。

「ありがとうございます！」

私達はお辞儀をしてその場を後にした。

私とウエンディは準備を整えて会場に向かう。

ああ、緊張してきた。

\*順位と得点

順位    ギルド名    得点    1位    妖精の尻尾    10Pt    2位    剣咬の虎    8

Pt    3位    蛇姫の鱗    5Pt    4位    妖精の棺    2Pt

\*出場者一覧

・妖精の尻尾

ナツ

ガジル

ラクサス

ウエンディ

アリス

・ 剣咬の虎

ステイング

ローグ

ユキノ

ミネルバ

ルーファス

・ 蛇姫の鱗

レオン

トビー

ユウカ

シエリー

シエリア

・妖精の棺  
セントラル  
ルルイエ  
レーグ  
ハント  
ホミカ

# 1日目 競技パート 伏魔殿（パンデモニウム）

「さあ！パンデモニウム出場者は」

フェアリーテイルからアリスとウエンディ！！

セイバートゥースからユキノとステイング！

マーメイドヒールからトビーとユウカ！

フェアリーコフィンからルルイエとレーグ！！

それではルールの説明から！こちらをご覧下さいカボ！」

パンデモニウム ルール

抽選により順番を決め、順番に魔獣を倒していく競技です。

魔獣は全部で200体。

4つのランクに別れており、どのランクの魔獣が出るかは完全にランダムですが指定数が多いほどより高ランクが出やすくなります。

どのランクの魔獣を倒しても討伐数には変わらない為、多い指定数を宣言する程難しくなります。

指定した数の魔獣を倒すか倒せず敗れるかで次の番の人へ挑戦権が移ります。

指定した数の魔獣を討伐できなかった場合、討伐数は0となりますが魔獣の数は減りません。

指定した数の魔獣を討伐できなかつた場合も次の手番は回ってきます。

0体になるまで続き、0になった時の討伐数が高い順にポイントが与えられます。

1位：10Pt 2位：8Pt 3位：5Pt 4位：2Pt

パンデモニウム内モンスタールランク

ランク	数	S	10体	A	30体	B	60体	C	100体
-----	---	---	-----	---	-----	---	-----	---	------

エルザがやった時の倍になってる。

まあ、2人になったしそりやそうか。

「それでは最初にくじ引きで順番を決めるカボ！代表者1名は前に出て下さいカボ。」

私が前に出ると職員の男性がくじを4本持っていた。

私は適当にくじを引くとそこには1と書かれていた。

1番最初か。

「順番が決まりましたカボ！」

フェアリーテイル、ラミアスケイル、フェアリーコフィン、セイバートウースの順で

初めて行くカボ！

それでは、パンデモニウムスタートカボ！」

その言葉と共に目の前に巨大な城が現れた。

そして、城の上部には2000の文字が書かれている。

「それでは、フェアリーテイル！討伐する魔獣の数を指定するカボ！」

私はウエンディと眼を合わせる。

「アリスに任せるよ。」

「わかった。」

ウエンディが微笑んで言った。

さて、どうしようか。

2000体なら半数以上の1001体倒せば1位確定だ。

その数ですらエルザの数を越える。

しかし、私は少しだけ思うことがあった。

ギルドに参加してから今までこれと言った活躍は出来ていない。

勿論、誉められたり、お礼を言われたりをするがそれでも、他の・・・

ナツ、ルーシィ、エルザ、グレイなんかより活躍していないだろう。

私とウエンディが人気なのはアイドル的な人気であって強さではない。

だったら、ここで強さも見せて起きたい。

あの技を使う練習にもなりそうだし。

あまり手の内は明かしたくはないがそれでも、今はやれるだけやってみたいと言う気持ちの方が勝っている。

「決めました。私達が挑むのは・・・200体!!

全部私達でお相手します!

数年前のエルザさんが全部を相手したのなら、同じギルドのメンバーとして私達も全部を相手致します!!」

私が言う与会場が驚いた。

ただの可愛い魔導士コンビ。

私達の事はそう思う人が多いだろう。

だからこそ、ここで实力を見せる。

「ほ、本気カボ!?!」

「200体倒せば1位は確定ですもんね?」

それに、エルザさんが言っていました。

『この競技は一番最初の者の勝利だ。』と。

なら、エルザさんの教えに従うまでです。



虹の滅龍魔導士、アリス・アルヴァスター！

いぎ、参ります!!」

私がそう言うのとフェアリーテイル側の観客席からおおー!と歓声が上がります。

「か、カボ!では200体でパンデモニウムスタートカボ!」

その言葉と共にわらわらと魔獣が出てくる。

200体の魔獣はそれぞれ多種多様。

中にはドラゴンにも似た巨大な魔獣もいる。

「ウエンデイ!援護お願い!あれで1発で終わらせるから!!」

「うん!神の騎士!!」  
デウスエクセス

ウエンデイの魔法で私とウエンデイの能力が強化される。

「ウエンデイ!魔法融合行くよ!」  
ユニゾンレイド

「うん!」

私が言うとうエンデイが領いて手を繋いだ。

「モード:天火龍!」

私がそう言うってからウエンデイにキスをして舌を絡める。

これこそが私の特徴、ギフトだ。

滅龍魔法を相手に渡せる力。

これでウエンデイに天火龍を渡す。

「モード：氷雷龍！」

私がそう言つてモードをもう一度変える。

「行くよ！ウエンデイ！」

「うん！アリス！」

私達は手を繋いだまま力を貯めて解き放つイメージをする。

「ドラゴンフォース!!」

私とウエンデイが叫ぶとウエンデイは髪が桜色になり、私は側頭部にオウムガイの様な角、背に黒い翼と尻尾が生えた。

私は半龍半人だからドラゴンフォースでこうなるのだ。

「【滅龍魔法秘奥義】てんらいひょうえん 天雷氷炎：照破・天空穿!!」

私とウエンデイがそう言つてウエンデイは左手に風、右手に炎を、私は右手に雷、左手に氷を纏つてウエンデイの起こした風に全てを巻き込んだ。

ウエンデイの起こした竜巻の中で炎が燃え、雷が鳴り響き、氷が舞う。

巨大な竜巻は全てを飲み込んでパンデモニウムごと破壊した。

「これがフェアリーテイルの魔導士です!!」

私とウエンデイは手を握つてその手を空に掲げて言った。

そしてそのまま気を失ってしまった。

実は言うところの魔法はまだ未完成なのだ。

使うとほぼ確実に魔力切れで気絶してしまう。

「な、なんとー!! 200体全てを倒しきってしまった!!」

これが、フェアリーテイルの力なのか!!」

「ウエンディ!!」

「アリス!!」

フェアリーテイルの皆が闘技場に降りてきて私達の元に集まる。

「あはは、魔力切れちゃいました。」

「私もです。すみません、後はお願います。」

私とウエンディはそこで意識が途切れた。